

いまでもむかしも愛別ばなし

水上 勉

いまもむかしも愛別ばなし

定価九五〇円

昭和五十二年九月一日第一刷発行
昭和五十二年十月一日第二刷発行

著者 水上 勉

発行者 大沼 淳

印刷所 精興社

製本所 大口製本印刷

発行所 文化出版局

東京都渋谷区代々木三一二一一

郵便番号一五一

電話(〇三)三七〇一三一(代)

振替東京二一九五六七〇

目次

まえがき

7

五障三従の妻

13

鈴木正三の妻

20

一休と盲女

27

龐居士の妻

34

施陀羅の娘

41

恵信尼

47

蓮如の妻

60

山寺のだいこくさん

73

放哉の妻

80

大雅の妻

88

周防のおいし

94

小谷の方

101

光秀とおこう

108

朝倉義景の妻

114

忠興の妻玉子

121

若狭の松の丸殿

128

采女正の妻

138

小五郎と幾松

144

伊藤博文の妻

156

下田のお吉

162

秋水と千代子

174

すがと秋水

181

田守り妻

188

戦後生還者の妻

195

姦通妻(1)

202

姦通妻(2)

208

姦通妻(3)

215

お初、徳兵衛

221

瞽女の夫

228

あるはなれ瞽女

235

きつね娘

241

芸妓の結婚

248

孤島の女たち

255

未婚の母

262

装画

横手由男

装幀

万膳 寛

まえがき

この世は、男と女の世界である。それ以外の人間はいない。しかし、昨今は一見、男だか女だかわからぬ風体の人物が登場しているが、世に両性具有の人間はいないところを見ると、やはり、風体をはぎとって裸にすればどちらかであることがわかる。男が女になりたい、女が男になりたい夢をもつことはあっても、どっちみちそれ以外の人間に生まれかわることは出来ない。不思議なことである。この男と女しかない人間界に、厄介なことは、性の具有があつて、男は女に魅かれ、女は男に魅かれて生きる。恋愛、結婚がその証である。倦きもせず、太古から男女は求めあつて生きた。そうして、子をうんだ。おお、この氣の遠くなりそうなほどの長い長いとなみ。人間とは、まことに辛抱づよい生き物だと私は思う。

今我が身体内外の所有、何を以て本と為せんや。身体髪膚は父母に稟く、赤白の二滴始終是れ空なり。所以に我に非ず。心意識智、寿命を繋ぐ、出入りの一息畢竟如何、所以に我に非ず。

私という人間は、いったいどこから生まれて、どういう存在なのか、と弟子が道元禪師にきいたところ、禪師がこたえた文句である。骨や肉や血やはらわた、毛髪、皮膚の一切をよく観察してみよ。お前さんという人間は、父母のおとした白と赤の二滴の和合にほかならぬ。生命といっても、精神といっても、お前さんが吐いてのち吸うている一と息の瞬間の持続にすぎぬ。もともと、「我」という本体はどこにもない。と教えられたとうけとてよい。かくいう禪師も、人間の出所を父母の二滴にあるとなさる以上は、倦きもせずくりかえされる男と女の交合を快くお認めになっている。左様。男と女は、ながいあいだ火花をちらして、子をうみ育ててのち死に、また新しい男の子と女の子が、同じようなことをくりかえしてきた。

禪師のように、われわれも悟っておれば、「我」と思えるこの身体も、身体に宿っていると見える精神も、空なるものに思え、何ら執着するところはないようだけれど、凡庸であるわれわれは、倦きない行為のなかに、喜怒哀楽がからんで、生きるということとは、切なく、楽しく、また悲しいもののように思われる。弟子が迷いに迷う自分について問うた心境は、凡庸のぼくなどしょっちゅうある。倦きもせずわが身に宿る欲望と性、厄介な業をひきずって、ぼくらの先輩は、千差万様の愛別のドラマを上演してこの世を去っていった。ぼくもそのあとをゆく一人だ。

「いまもむかしも愛別ばなし」。この本の題をかくえらんでみたのも、じつは、このような感慨があるからであって他意はない。人と生まれた以上は、どうしてこうも、かなしい業に心身をと

られて、迷い生きねばならぬものか。畢竟は、吐く息、吸う息の間の露のいのちと知りつつも、こと愛慾がからめば、永劫の生がありそうに思われて、のたうち廻り、憎悪がからめば、朝露の間の辛抱と知りつつも、またのたうち廻って生きる。

括っていえば、男女の生はこれにつきようが、しかし、おもしろいことは、この国の長い曆をふりかえって、戦国時代、封建時代、軍国主義時代、民主主義時代、ここ五百年足らずの歳月に制度や、風俗が交転しても、それぞれの時代を生きた男女の愛別が、その時代の相をうかべていることは興味ぶかい。所詮、男と女のかけひきにすぎぬが、封建は封建の、現代は現代のかけひきがあって、同じのたうち廻り方にしても、趣きがちがう。演じてみせる結末もまたちがう。そのところをのぞいてみたい、と思ったのが、この稿をおこす目的だった。さて、それが、予期した如く、読者につたわるかどうか、これもわからない。

文中、出家僧の愛慾はなしがかなり出てくる。これは何も、私がかつて宗門にあったからというわけではない。ただ、男と女しかないこの世の中で、僧なる人は、自己に戒律を与えて、**「男」**として生きようと夢みる世界だから、そのたてまえにそむいて、女を必要とすることの苦悩をいちばんよく噛みしめていることに思いが至ったからにほかならぬ。道元禪師が童貞であられた確証は、史家のどの所論をたずねても得られないし、一休禪師が宗門のいう如く清僧であったという証明も、どの史書にも出てこない。赤白の二滴の和合が人間の生誕だという以上は、

禪師も二滴和合に興味があったはずで、このことが、女性拒否の宗門生活をどのように歪めてきたかをのぞくのは、大方の興味だろう。

逆にまたいえば、戦国、封建の武將連が、自己の力に依じて、手当り次第の女性を側女にして、いまから思えば、城内をハーレムの如くに飾り、女性を群居させても、民主主義下の男女同権時代にはぐくまれた一対一の至上恋愛に匹敵する快楽がそこで味わわれたかどうか。そういう消息をのこした將軍も殿様もない。まことに男女のなかはおもしろいな、と史書をくりかえし読んで感興をます。私だけではあるまい。読者も同じことと判断して、「いまもむかしも」と愛別離苦の人世を散索してみた。したがって、同じような愛の、同じような色物語に出あっても辛抱していたきたい。時代はかわっても、男は、同じようなことをくりかえしてきた。致し方がない。散索は考えようによっては、近くの雑木林に入ったようなあんばいで、よく見れば、樹々にそれぞれ別があり、それぞれの個性の枝ぶりがあるに似ている。似ていても、みなそれぞれかわっていた。それがおもしろい。

前言は短いに越したことはない。さかしらにペンをとったのは、人の愛別に対する作者の考えを披瀝しておいたほうが、雑々たる林へ入りやすいと思ったからである。

いまもむかしも 愛別ばなし

五障三従の妻

仏門ではよく女性は五障三従の性さがある故に、といったようなことをいう。

五障とは、女性の身にそなわる五種の障害をいうそうだ。すなわち一に煩惱ぼんのう、二に業障ごうしょう、三に生障、四に法障、五に所知障といい、この五つは女性独得のもので、その障さわりのゆえに仏門に入れないというのである。三従とは幼くして父母に従い、成人して夫に従い、老いて子に従う意味で、女性は繫属けいぞくをはなれて暮らすことは出来ない、といったことを指す。「わたつみのあしまの浪をわけ来ても五の障のなきぞうれしき」「ねんごろに十のいましめうけつれば五の障あらじとぞ思う」などという古歌もあって、女性が無常を感じて、仏門に入ろうとすれば、男性よりも数多い戒を守らねば比丘尼びくにとなれない法則があった。つまり、仏教は人間平等を説きながら、女性を男性よりは罪ぶかいものとして今日に至っている。

こんなことをいうと、けしからぬ宗教だと女性軍から声があがりそうだが、前記の五障三従の説明も、いま、じつは『大日経疏』という經典と、『勝鬘經』しょうまんきやうという經典から引用している。

だが、お釈迦さまに説かれなくても世の中は、男ばかりでは生きてゆけないことはわかっている。五障三従の女性がなければ、人類は絶える。

名は秘すが、京都の臨済宗五山といえ、禪宗でも有名な本山である。その一寺の塔頭たつちゆうにA庵という由緒ある寺があった。塔頭とは大本山の塀の中にある小寺院のことで、昔は、この塔頭寺は幕府や上流武士、公家の菩提寺となり、そうした家系から出家した者が住職となり、本山の法要だとか、仏事を取りしきった由である。

A庵の住職小森宗海（仮名）が、宗門立中学を卒業して、B僧堂で八年の雲水修行を卒え、このA庵へ晋山したのは昭和十二年の春であった。ふつう禪僧が一ヶ寺の住職となるには、少なくとも、中学を卒えて経文を誦ずる智識をもち、八年間ぐらいの雲水を経て、禪の修行と、祖師の語録に通じていなければ、地位は与えられないことになっている。宗海師は、その経歴をまずまず卒えて、京都の大本山の塔頭へ入山できたのであるから、まあ、田舎寺へ赴任してゆかねばならぬ境遇に比すれば、出世といえぬことはなかった。

宗海師は、A庵へ入寺すると、生活も楽になったので、嫁が欲しくなった。三十歳の年齢は男ざかりである。檀家の人たちも、もし、宗海さんにその気があるなら、世話しよう、といった。